

【翻 訳】

イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(4)

亀谷 学・大塚 修・松本 隆志 訳注

本稿は西暦9世紀（ヒジュラ暦3世紀）の後半に著作活動を行ったイブン・ワーディフ・ヤアクービーの著書『歴史 *al-Ta'rikh*』の日本語訳注である¹。連載の第四回となる今回は、第一部・古代史部分のうち、ソロモンについての記述から、イスラエル王国・ユダ王国への分裂、メソポタミアの勢力によるパレスティナ支配、バビロン捕囚とそこからの帰還までを描いた部分、および、ユダヤ教徒の儀礼や習慣に関する部分の訳注と、その解説となる。なお、解説については亀谷が、日本語訳注部分については大塚が、それぞれ元となる原稿の作成を担当したが、それらはすべてメンバー三人による検討、議論を経た成果である。

〈今回の翻訳部分の解説〉

本号に掲載する翻訳は、第一回から第三回までに続く、いわゆる『旧約聖書』に遡る情報を基盤とする記述と、その末尾に付されたユダヤ教の教義や儀礼に関する解説部分となる。

前者のうち三分の一を占めるのは、ソロモンに関する情報である。その内容は、①ソロモンの異能、②ソロモンの王権の確立と結婚、③ソロモンの夢の中での神との対話と彼の裁定、④ソロモン統治下の配下と税の割り当て、⑤神殿の建設、⑥神殿建設終了後の祭り、⑦シェバの女王の逸話、⑧ソロモンの妻たちと偶像崇拜、⑨ソロモンの指輪と彼に化けた悪魔の逸話、⑩ソロモンの統治と彼の死、となっている。

ソロモンの記事に続いて、「ソロモンの子レハブアムとその後の諸王」と題された部分に入る。ここでは、分裂した古代イスラエルの民の行く末が王の治世ごとに語られるが、それらはユダ王国

¹ 著者とその著作、写本と刊本、翻訳の状況などについては、亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(1)」『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部) 8 (2020), pp. 123–154にて述べたので、適宜参考とされたい。

なお、以後この同訳注の第一回は「『歴史』訳注(1)」、第二回である亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(2)」『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部) 10 (2021), pp. 113–154は、「『歴史』訳注(2)」、第三回である亀谷学・大塚修・松本隆志 訳注「イブン・ワーディフ・ヤアクービー著『歴史』訳注(3)」『人文社会科学論叢』(弘前大学人文社会科学部) 12 (2022), pp. 69–100は「『歴史』訳注(3)」と略記する(それぞれ、<http://hdl.handle.net/10129/00007041>、<http://hdl.handle.net/10129/00007395>、<http://hdl.handle.net/10129/00007720>からダウンロードすることができる)。

を基本としながらも、ユダ王国とイスラエル王国の記述がやや錯綜している部分があり、予備知識がなければ十分な理解が難しい箇所もある。その内容は、①レハブアムと古代イスラエルの民の王国の分裂、②ヤロブアムの支配とその顛末、③アビヤムの統治、④アサの統治、⑤ヨシャファトの統治、⑥イエホラムの統治、⑦アハズヤフの統治、⑧アタリヤフの統治、⑨ヨアシユの統治、⑩アマツヤフの統治、⑪ウジヤフの統治、⑫ヨタムの統治、⑬アハズの統治、⑭ヒゼキヤの統治、⑮マナセの統治、⑯アモンの統治、⑰ヨシヤフの統治、⑱イエホアハズの統治、⑲イエホヤキムの統治、⑳ネブカドネツァルの支配と古代イスラエルの民のエルサレムへの帰還、となっている。

ここまで続いてきた『旧約聖書』の歴史の流れに沿った記述は、古代イスラエルの民のバビロン捕囚からの帰還でひと区切りがつけられ、その後に彼らの教義や儀礼についての記述が付されている。その内容は、①彼らの教義、②彼らの齋戒の日、③彼らの祭りの日、④彼らの礼拝と律法とその言語であるヘブライ語とヘブライ文字、⑤彼らの妻に関する慣習、⑥彼らの食事に関する慣習、⑦彼らの暦、となっている。

(1) ソロモンの記述とソロモン以後の古代イスラエルの民の歴史

ソロモン自身の記述としては、概ね『旧約聖書』「列王記上」にある記述が並べられているが、最後に置かれたソロモンの指輪と悪魔の話のみが、『旧約聖書』に関連の記述が見られない逸話となっている。ソロモン以後の古代イスラエルの民の歴史についての情報も、主に『旧約聖書』「列王記」を情報源とするものと考えられる。ここでは、『クルアーン』などのイスラームの視点から書かれた史料にその時期の逸話についての記載がないため、関係する情報が入り込む余地がほとんどないようである。

一方で、ユダ王国とイスラエル王国の外部勢力との接触については、『旧約聖書』の記述とも、現代知られるようになった歴史的事実とも異なる、若干の混乱した記述が見られる。例えば、アサの時代の「エチオピア王ゼラハとインド王がエルサレムに攻め込んで来た」という記述²、マナセの時代の「そこで神は、ルームの王クスタンティーンにマナセを支配させた。クスタンティーンは彼と戦い、彼を捕虜とした」という記述³、また、バビロン捕囚からの解放がネブカドネツァルの時代に行われたと受け取ることのできる記述⁴、などである。

そのほか、ヤアクービーは、バビロン捕囚からの帰還と神殿の再建の記述で古代イスラエルの民の歴史に一区切りをつけている。例えば、これ以前の部分でヤアクービーが参照したと思しきシリア語史料『宝の洞窟』においては、この後の古代イスラエルの民の歴史については述べられていないが、ゼルバベルからイエスの母となるマリアへ続く系譜が示されている⁵。古代ペルシアの歴史と

² L: I, 66.

³ L: I, 70.

⁴ L: I, 71.

⁵ Anonymous, *La Caverne des trésors: les deux recensions syriaques*, ed. & tr. Su-Min Ri, Lovanii: E. Peeters, 1987, pp. 330–335.

の両軸で語りを紡いできたタバリーも、バビロン捕囚からの帰還後の古代イスラエルの民の歴史にはほとんど触れることなく、古代ペルシアの歴史の一部として語られるアレクサンドロスを挟んで、マリアからイエスへと叙述をつなげている⁶。ディーナワリーもまた、ゼルバベルがバビロン捕囚から帰還し、神殿を再建したところで、古代イスラエルの民の記述を終えている⁷。一方でイブン・クタイバは『知識の書』の中で、エズラ、ダニエル、エゼキエル、イルヤース、エリシャウ、ヨナ、ザカリヤといった、神殿再建以後の預言者たちをそれぞれ採り上げ、そこから直接イエスへとつなげている⁸。

これらの歴史叙述と比べた時、ヤアクービーのテキストは、明らかに古代イスラエルの民の歴史の記述の終わりをバビロン捕囚からの帰還に置いていると言える。全体として、初期のムスリムによる歴史叙述には、バビロン捕囚以後の記述が薄く、利用できた情報量が少なかったということは言えるであろうが、ヤアクービーが古代イスラエルの民の歴史とイエスの記述の間に明確な線引きをしていること、それをバビロン捕囚からの帰還に置いていることは、ヤアクービーをはじめとする初期の歴史叙述に特徴的な史観であると見做すことができるかもしれない。

(2) ユダヤ教の教義や諸習慣についての記述

ヤアクービーは、本稿で訳出した部分の末尾において、ユダヤ教の教義や諸習慣について記している。その内容は、①彼らの教義、②彼らの齋戒の日、③彼らの祭りの日、④彼らの礼拝と律法とその言語であるヘブライ語とヘブライ文字、⑤彼らの妻に関する慣習、⑥彼らの食事に関する慣習、⑦彼らの暦、であって、この時期のアラビア語史料に残されたものとしては、それなりに詳しいものであると評価できるだろう。ただし、現代の我々の目から見て、ここに記された情報は、それほどユダヤ教について体系的に示したとは言えないと感ぜられる。

しかし、ヤアクービーはすでに、これまでの記述の中で、『旧約聖書』由来の情報という体裁をとりながら、ユダヤ教の教義や諸習慣について、いくつかの場所でまとまった形で記述している。モーセが「会見の幕屋」を建てた際には、浄罪の供儀あるいは全焼の供儀に関する説明を神の言葉として伝えている⁹。それに続いて、モーセに対して与えた「十戒」の内容が記され、例えば本稿末尾の箇所では触れられない安息日に関する説明もそこで記述されている¹⁰。モーセの死の前の記述では、神からモーセを通じて伝えられた事柄として、『旧約聖書』「申命記」の記述をベースとする

⁶ Abū Ja'far Muḥammad b. Jarīr al-Ṭabarī, *Ta'rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. M. J. de Goeje, 15 vols., Leiden: E. J. Brill, 1879–1901, serie 1, pp. 691–711.

⁷ al-Dīnawarī, *al-Akḥbār al-Ṭiwāl*, ed. 'Abd al-Mun'im 'Āmir, Cairo: Dār Iḥyā' al-Kutub al-'Arabīya, 1960, pp. 26–27. ただし当該刊本ではゼルバベル زربيل とおぼしき人名が روبيل とされている。また、この時のペルシア王は Bahman b. Isfandiyādh とされている。

⁸ Ibn Qutayba, *al-Ma'ārif*, Cairo: Dār al-Ma'ārif, [1969], pp. 49–52.

⁹ L: I, 35; 『歴史』訳注(2) pp. 139–140.

¹⁰ L: I, 36; 『歴史』訳注(2) pp. 140–141.

様々な教義や取り決めが、刊本で5ページにわたって記されている¹¹。その中には偶像崇拜の禁止や、裁判における賄賂の禁止、複数の証言者の必要性、降伏を呼びかけてから戦い、敵が降伏した場合は税を課すのを止めること、男女間の諸問題について、高利の禁止、喜捨の規定など、さまざまな事柄が述べられている。さらに、ダビデについて語られている部分では、『詩篇』からの引用として、神への賞賛の方法について記されている¹²。もちろん、これらによって、当時のユダヤ教の教義や儀礼について十全に述べられているとは言い難いが、これらの歴史叙述の中に埋め込まれた記述と本稿の末尾にまとめられた情報とを相補的に読むことで、かなり多くのことを知ることができたであろう。

こうした構造が採られた背景には、モーセとダビデが『律法』と『詩篇』を通じて神の言葉を伝えたという理解があったと考えられる。「『歴史』訳注(2)」の解説でも述べたように、ヤアクービーはいくつかの箇所、『クルアーン』の文言などを『律法』『詩篇』の記述部分にも忍ばせており、ムスリムの理解に引き付けたユダヤ教理解であることが指摘できるだろう¹³。

ムスリムの記したユダヤ教に関する記述を包括的に分析したアダンは、とりわけユダヤ教徒の祭りについて記した部分について、それが『旧約聖書』の中の知識にとどまるものであり、それ以後のものが反映されていないと述べている¹⁴。一方で、そのあとに記述されている動物の屠殺に関する記述の中には、『旧約聖書』に記述がなく、『タルムード』の中の議論と対応すると思しき部分もある¹⁵。この箇所におけるヤアクービーの書きぶりは、ユダヤ教徒の屠殺について、実際に見て説明を受けたことをうかがわせるものであり、必ずしもヤアクービーに『旧約聖書』以降の情報がなかったというわけではないだろう。ラザルス・ヤフェフは、ヤアクービーが「アダムとエバが身につけていた衣は光であった」と述べている部分について、2世紀に活躍したユダヤ教徒の学者であるラビ・メイルの神秘主義的な解釈を反映したものだとして分析しているが、アダンはこれを根拠として、ヤアクービーが、『旧約聖書』に対する注釈であるミドラシュなどからも情報を得ていたと考えている¹⁶。そのほか、当時のユダヤ教徒が用いていた紀年が、「神殿(=第二神殿)の破壊」から数えていると述べていること¹⁷からも、ヤアクービーが単に『旧約聖書』の情報に拠っていたわけではないことがわかるだろう。

¹¹ L: I, 41–46; 「『歴史』訳注(2)」pp. 147–154.

¹² L: I, 57–59; 「『歴史』訳注(3)」pp. 95–99.

¹³ 「『歴史』訳注(2)」pp. 116–117.

¹⁴ C. Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible: From Ibn Rabban to Ibn Hazm*, Leiden: Brill, 1997, p. 75.

¹⁵ L: I, 73.

¹⁶ L: I, 2; 「『歴史』訳注(1)」p. 137; H. Lazarus-Yafeh, *Interwind Worlds: Medieval Islam and Bible Criticism*, Princeton: Princeton University Press, 1992, p. 114; Adang, *Muslim Writers on Judaism the Hebrew Bible*, p. 120.

¹⁷ L: I, 73.

〈凡例の追加と修正〉

訳注に関わる凡例については「『歴史』訳注(1)」pp. 133–134、「『歴史』訳注(2)」pp. 117–118、「『歴史』訳注(3)」pp. 74–75を参照されたい。

本稿からの大きな変更点としては、主に写本と刊本の異同を示す校訂注を、通常の注釈とは切り離し、原稿の末尾にまとめたことである。それに伴って、校訂注については大文字のローマ数字で示し、一箇所通常注と校訂注が重なった場合は、校訂注、通常注の順で付すこととした。

以下、追加・修正の必要な事項を挙げる。

(1) 追加

・「『歴史』訳注(4)」については、校訂に関する注釈を後注とし、大文字のローマ数字による番号でそれを示した。

(2) 略号

本稿で文献表示の際に用いられる略号は以下のとおりである。なお、事典類については、文献表示の際はその項目名で表示し、ページ数は省略する(略号については各号で使用されるものについてその都度掲載する)。

L: al-Ya‘qūbī, *al-Ta‘rīkh*, ed. M. Th. Houtsma, Leiden: E. J. Brill, 1883 (repr. 1969). (ライデン版刊本)

M: Manchester, John Rylands Library, Arabic 801. (マンチェスター写本)

C: Cambridge, Cambridge University Library, Qq. 10. (ケンブリッジ写本)

E: M. S. Gordon et al., *The Works of Ibn Wādiḥ Al-Ya‘qūbī: An English Translation*, 3 vols., Leiden: E. J. Brill, 2018.

*EI*²: *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, 11 vols., ed. C.E. Bosworth et al., Leiden: E. J. Brill, 1960 (1954–2008).

*EI*³: *Encyclopaedia of Islam*, Three, ed. M. Gaborieau et al., Leiden: E. J. Brill, 2007–.

(必要に応じてオンラインエディションも用いた <https://referenceworks.brillonline.com/browse/encyclopaedia-of-islam-3>)

*EJ*²: *Encyclopaedia Judaica*, 2nd edition, 22 vols., ed. F. Skolnik et al., Detroit: Macmillan Reference USA, 2007.

『岩波イスラーム辞典』: 大塚和夫ら編『岩波イスラーム辞典』(岩波書店、2002年)

『旧約新約聖書大事典』: 旧約新約聖書大事典編集委員会編『旧約新約聖書大事典』(教文館、1989年)

『古代オリエント事典』: 日本オリエント学会編『古代オリエント事典』(岩波書店、2004年)

『旧約聖書』：旧約聖書翻訳委員会訳『旧約聖書 [机上版]』全4巻（岩波書店、2004–2005年）

『七十人訳聖書』：秦剛平訳『列王記』（青土社、2019年）、『歴代誌』（青土社、2019年）

『ペシッタ』：G. Greenberg, D. M. Walter trs., G. A. Kiraz, J. Bali eds., *Kings*, Piscataway: Gorgias Press, 2018; *Chronicles*, Piscataway: Gorgias Press, 2019.

『バビロニア・タルムード』：*Koren Talmud Bavli*, The Noé Editio. ed. R. J. Schreier et al., Jerusalem: Koren Publishers, 2012–2019. (ただしテキストの参照には <https://www.sefaria.org/texts> に掲載されている The William Davidson Talmud を利用した)

本稿は科学研究費「初期イスラーム時代歴史叙述におけるカリフ観の史料間比較分析」（基盤研究(C) 21K00901）、「イスラーム時代西アジアにおけるイラン概念の復活と変容」（若手研究20K13193）の研究成果の一部である。

〈訳注〉

ダビデの子ソロモン

神がダビデを召した時¹、彼に代わりソロモンが預言者にして王となった。すると、その偉大な書(『クルアーン』)の中で語られたように、神は、ジン¹⁸と人間、風と雲、鳥と獣を彼に従わせ¹⁹、《大きな王権を》²⁰彼に授けたのだった。

ダビデの軍の長ヨアブ¹¹とその郎党の一団は、ソロモンの兄弟たちと組んで、[61]王権をソロモンから奪おうとした。するとソロモンは、彼らを最後の一人に至るまで殺し、さらには、兄のアドニヤ²¹を殺した²²。かくして、王権はソロモンに相応しいものとなり、彼の権力 *sultān* は確固たるものとなった。

彼はエジプトの王ファラオの娘と結婚し、ダビデの家で彼女と交わった²³。

ソロモンは犠牲を捧げるためにイスラエルの民を集めた。かくして彼は1千頭の生贄を捧げた²⁴。

そして、その晩ソロモンは、次のような夢を見た。主^{しゅ}が彼に「お前が望むものを求めなさい。さすれば私がお前に授けよう^{III}」と話しかけた。するとソロモンは言った。「おお、主よ、あなたはダビデに大きな恩恵を授け、彼の死後にあなたの僕^{しもべ}であるソロモンを王としました。ですので、私に賢き心をお与えください。さすれば、公正さをもって私はあなたの僕^{しもべ}たちを裁き、善悪を見極めましょう」と。すると神は言った。「まさしくお前は^{IV}このことを求めた。お前は財を求めず、敵対者たちの魂を求めず、長寿を求めなかった。そうではなくお前が求めたのは、それをもって裁定と判決を見極めることのできる叡智であった。まさにそのために、私はお前の要求に応じ、お前の前には誰一人としてなされたことはなく、お前の後にも誰一人としてお前のようにはなされないほどの分別のある聡明な心をお前に授けたのである。さらに私は、お前が求めなかった財、良馬 *'itāq*、榮譽をお前に与えよう。お前がもし私の道を歩み、お前の父ダビデが守ったように私の法 *sharā'i'* と

¹⁸ イスラーム教徒の間で広く知られている超自然的存在、精霊(大塚和夫「ジン」『岩波イスラーム辞典』)。

¹⁹ 神がソロモンに風 *rih* を従わせたことについては『クルアーン』21章81節、34章12節で、ソロモンのためにジン *jinn*、人間 *ins*、鳥 *tayr* の軍隊が集められたことについては27章17節で言及されている。ヤアクービーは、この箇所について『クルアーン』に依拠しているように記しているが、『クルアーン』の語彙索引(Muhammad Fu'ād 'Abd al-Bāqī, *al-Mu'jam al-Mufahras*, Cairo: Dār al-Ḥadīth, 1996)によれば、『クルアーン』には、ここに登場する「雲 *saḥāb*」についての言及はソロモンに関連の記述には存在せず、「獣 *sibā'*」についての言及はそもそも存在しない。

²⁰ ソロモンに関連する記述ではないが、これと同じ表現が『クルアーン』4章54節で確認できる(E: 318, n. 241)。この段落については、『旧約聖書』系統の情報にではなく、『クルアーン』の情報に依拠したソロモン伝だと考えられる。

²¹ 前出のアドニヤの表記は *Arniyā* あるいは *Dūniyād* となっていたが(『歴史』訳注(3)) p. 70参照)、ここでは、*Adūniyās* となっている(M: 12b; C: 16b)。

²² 『旧約聖書』「列王記上」2章13–35節では、ソロモンの命によりアドニヤとヨアブが討たれた詳しい経緯が説明されている。

²³ 『旧約聖書』「列王記上」3章1節に対応。

²⁴ 『旧約聖書』「列王記上」3章4節、「歴代誌下」1章6節に対応。

指示を守るのであれば、私はお前の寿命をのばし、お前の権威を大きなものとするだろう」と²⁵。かくしてソロモンは、判決のための座を設けて、イスラエルの民に裁定を下すようになった。すると彼らは、ソロモンの叡智、公正なる判決、弁舌、流麗な言葉に驚くのであった²⁶。

ソロモンには、指揮官たち、宰相たち wuzarā', 書記たち、代官たちがいた。彼の宰相²⁷はナタンの子ザブド Zābūd^Vで、ソロモンの戦いを司るのはイエホヤダ Yūyāda'の子ベナヤ Banāyāで、ソロモンの金庫番²⁸はアヒシャル Abīshār^{VI}で、徴税 kharāj を司るのはアブダ 'Abdā^{VII}の子アドニラム Adūnīrām^{VIII}であった²⁹。またソロモンには12人の代官がおり、彼の(宮廷の)出費を担っていた。それぞれの代官が一月毎の出費を担っており³⁰、その出費は、イスラエルの民の諸支族に課せられていた。毎日代官に割り当てられていたものは^{IX}、良質な小麦粉30クッル³¹、良質な小麦ふすま60クッル、[62] 肥えた雄牛10頭^X、雄牛20頭³²、仔羊100頭であった³³。またソロモンは、馬をつないでおく4万頭分の馬留めを保有していた³⁴。彼は馬を溺愛していたが、それについての彼の情報を、神は既に語った³⁵。

ソロモンは聖なる神殿 bayt al-maqdis の建設を開始した。彼は、「神は我が父ダビデに、神殿を建てるように命じたが、ダビデは戦に明け暮れていた。そこで神は、『お前の子ソロモンが、我が名の許に神殿を建設するだろう』とダビデに啓示を下したのである」と言った。その後ソロモンは、松の木材と糸杉の木材³⁶を運ぶために、人を派遣した³⁷。そして彼は、石を用いて聖なる神殿を建て、それを堅固なものとした。彼はその内側を木材で覆い、その木材に彫刻を施した。そして、金で覆

²⁵ この段落の以上の内容は、『旧約聖書』「列王記上」3章5-14節、「歴代誌下」1章7-12節に対応。

²⁶ 『旧約聖書』「列王記上」3章28節に対応。

²⁷ 『旧約聖書』では、ザブドは祭司で王の友だとされている。

²⁸ 『旧約聖書』では、アヒシャルは宮廷長だとされている。

²⁹ 『旧約聖書』「列王記上」4章1-6節に対応。

³⁰ 『旧約聖書』「列王記上」4章7節では、「彼らは、王と王室の食糧を供給した。すなわち、各自、1年のうちの1ヶ月分の食糧を供給した」となっている。

³¹ 容量の単位。イラクでは36,000リットルだが地方差が大きい。詳しくは W. Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, Leiden: E. J. Brill, 1955, pp. 42-43 参照。『旧約聖書』「列王記上」では「コル」という単位で登場し、1コルは約230リットルであるという註が付されている(『旧約聖書II歴史書』「列王記上」p. 373, n. 14)。G. Sauer+秋吉輝雄「度量衡」『旧約新約聖書大事典』も参照。

³² 『旧約聖書』では「放牧の牛」となっている。

³³ 『旧約聖書』「列王記上」5章2-3節に対応。

³⁴ 『旧約聖書』「列王記上」5章6節に対応。

³⁵ 『クルアーン』38章31-32節に、ソロモンに関することとして、「俊足の駿馬たちが晩に彼に献上された時のこと。彼は言った。『私は、善への愛を愛するあまり(この世の楽しみ of 駿馬に目を奪われ)、わが主の念唱から気が逸れ、ついに(礼拝の時間が過ぎ太陽が夜の)帳によって身を隠してしまった』」とある(E: 319, n. 248)。

³⁶ この木材について、『旧約聖書』「列王記上」5章22節では「杉の木材と糸杉の木材」と、『七十人訳聖書』5章22節では「杉の木材と松」となっており、後者に近い形となっている。

³⁷ 『旧約聖書』「列王記上」5章15-20節、「歴代誌下」2章1-6節に対応。『旧約聖書』では、人を送った先は、ツロの王ヒラムだとされる。『歴史』では、これ以前に同名のダビデに遣わされた預言者が登場するが、この人物と同じ人物と解釈されているのかどうかは分からない(『歴史』訳注(3)) p. 99, n. 270 参照)。

われた聖所を神殿に設けたが、その中には金の祭具が置かれていた³⁸。

彼はその後、聖櫃を担ぎ上げ、それを聖所の中に置いたが、その櫃の中には、モーセが置いた^{XI} 2枚の板³⁹が収められていた。ソロモンは聖櫃を置くと、聖所の前で立ち上がった。そこには既に、イスラエルの民の諸集団が集結していた⁴⁰。そこでソロモンは神を賞賛し、その栄光を称え、その恩寵を賞賛した。それは、神がソロモンをイスラエルの民の王とし、ソロモンの手によって聖なる神殿の建設を成し遂げたためであった⁴¹。イスラエルの民はソロモンの許に集まっていた。彼は言う。「主^{しゅ}が祝福され至大でありますように。彼はイスラエルに安息を授け、その正しい言葉は成し遂げられました。彼が僕^{しもべ}たるモーセを通して語ったことのうちで、成し遂げられなかったことは一つとしてありません。私は、我らが主^{しゅ}である神に求めます。我らの父祖とともにあったように我らとともにありますように。我らを見捨てたり見放したりしませんように。そうではなく、我らの心を主^{しゅ}の方へと向けますように。そうすれば我らは、主^{しゅ}が満足する道を歩み、主^{しゅ}が我らの父祖に命じた慣習 sunna^{XII}、契約 ‘uhūd、指示 waṣāyā、裁定 ahkāmを守ります。また、我らの言葉を主^{しゅ}に近く^{XIII}、主^{しゅ}の御許で満足されるものとなし、我らの心を主^{しゅ}に従い、主^{しゅ}の命令を守るものとなしますように」と⁴²。

ソロモンは聖なる神殿 bayt al-maqdis の建設を終えると、祭りを催し、神殿の中で生贄を捧げた。そして、14日間⁴³、それを行いつづけた。その際、既に [63] イスラエルの民が彼の許に集まって来ていた。ソロモンは彼らへの施しを終えると立ち上がり、神の栄光を称え、神を賞賛した⁴⁴。彼がそれを終えると、神は彼に対して啓示を下した。「まことに私はお前の祈りを聞き、お前の捧げものを見た。もしもお前が私に服従し続けるのであれば、私はお前の王権をお前に、そして、お前の死後にはお前の子孫に授け、この神殿を終末の時まで akhir al-dahr 神聖なものとしよう。しかし、もしもお前たちが私の命令に背いたり、お前たちのうちの誰かが私との契約に違反するようなことがあれば、私はその者から王権を取り上げ、この神殿を未来永劫、廢墟となすだろう」と⁴⁵。

シェバ Saba⁴⁶ の女王ビルキース Bilqīs⁴⁷ がソロモンの許にやって来た。彼女に関しては、神が自ら

³⁸ 『旧約聖書』「列王記上」6章15–22節、「歴代誌下」3章3–9節に対応。

³⁹ モーセの板については、「『歴史』訳注(2)」p. 140, n. 199など参照。

⁴⁰ 『旧約聖書』「列王記上」8章1–9節、「歴代誌下」5章2–10節に対応。

⁴¹ 『旧約聖書』「列王記上」8章15–21節、「歴代誌下」6章5–11節に対応。

⁴² 『旧約聖書』「列王記上」8章56–61節に対応。

⁴³ 『旧約聖書』「列王記上」8章65節によれば、7日間の^{かりいお}仮庵の祭り（後出記事 p. 65参照）に加えて、7日間の奉獻の祭りが行われたとされる。

⁴⁴ 『旧約聖書』「列王記上」8章62–66節、「歴代誌下」7章4–10節に対応。

⁴⁵ 『旧約聖書』「列王記上」9章3–8節、「歴代誌下」8章12–21節に対応。

⁴⁶ 紀元前8世紀末から紀元3世紀にかけて現在のイエメンの地に成立し、最も長く存続した古代アラビア半島を代表する王国。香料貿易と灌漑農業により経済的に繁栄した（部勇造「シェバ」『岩波イスラーム辞典』）。

⁴⁷ 『旧約聖書』にも『クルアーン』にも女王の名は記されていないが、アラビア語文献ではビルキースという名前で登場する（部勇造「シェバの女王」『岩波イスラーム辞典』；E. Ullendorff, “Bilqīs,” *ET*²; E: 320, n. 251）。ユダヤ教とイスラーム教におけるシェバの女王に関する伝承の相違については、部勇造『シェバの女王：伝説

の偉大な書において語ったことが起こった⁴⁸。ところで、彼女が彼の許にやって来た時、金と竜涎香を積んだ駱駝の一群を彼のところに連れて来て、彼に言ったのだった。「あなたについての報せが既に私の許に届いておりましたが、この目で見るとはとても信じられませんでした」と。その後、彼女は自らの国へと引き返した⁴⁹。

ソロモンは驚くべき女好きで、語られているところによれば、700人の妻を娶った。その中には、エジプトの王ファラオの娘、アンモン人の多くの女たち、シリアの巨人であるモアブ^{XIV}の民の多くの女たち、エドム Idūm⁵⁰の多くの女たち、ヘト人 Ḥahānīyīn⁵¹すなわちシドン人 Šaydānīyīn⁵²の多くの女たちがいた。まさしくこれらは、神がその者たちと関係を持つことを禁じた諸集団 shu'ūb の女たちであった⁵³。

ソロモンには700人(の妻たち)がいた⁵⁴。ソロモンの妻たちの一人が彼女の父の顔を模した似姿を作った。そして、彼の別の妻がそれを見ると、彼女がやったようにそれを作ったのであった⁵⁵。すると神はソロモンを叱責して彼に言った。「お前の家では偶像が崇拜されているにもかかわらず、それによってお前は不快になっていないではないか。私は、お前から王権を剥奪し、お前の手から威光を奪い、諸支族をお前の子たちから隔てるだろう。だが、お前については、お前の父ダビデ(に言ったこと)を私は覚えている。ゆえに、お前が生きている間にはお前から王権を剥奪することはしない。また、諸支族のすべてを奪い去りせず、お前の手には二つの支族⁵⁶を残してやろう

の変容と歴史との交錯』山川出版社、2006年参照。

⁴⁸ 『クルアーン』27章20-44節。そこでは、ソロモンに脅迫されて伺候したシェバの女王が神への帰依を決意する場面が描写されている。

⁴⁹ 『旧約聖書』「列王記上」10章1-13節、「歴代誌下」9章1-12節に対応。この箇所は、ヤアクービーの文章では言及されていないが、シェバの女王はソロモンの名声を聞き、ソロモンを試すために質問をし、ソロモンはその質問のすべてに答え、シェバの女王は圧倒されたという内容の説話をふまえたものである(薮勇造『物語アラビアの歴史：知られざる3000年の興亡』中公新書、2018、pp. 12-13)。

⁵⁰ モアブの南境と、アカバ湾の中間にあるアラバ陥没の東の地帯を指す(V. Maag+石田友雄「エドム」『旧約新約聖書大事典』)。

⁵¹ 両写本では Ḥahānīyīn となっているが(M: 13a; C: 17a)、刊本では Jathānīyīn と直されている。『旧約聖書』では「ヘト人」となっている集団名が入る場所で、Ḥahānīyīn にも Jathānīyīn にもヘト人の意味はないため、とりあえずここでは両写本に従った。ヘト人は、『歴史』訳注(2) p. 149、『歴史』訳注(3) p. 92にも登場するが、綴りは異なっている。

⁵² シドンは、ティルスの方北35キロメートルに位置するフェニキアの港町(E. G. Kraeling+山形孝夫「シドン」『旧約新約聖書大事典』)。

⁵³ この段落は『旧約聖書』「列王記上」11章1-2節に対応。

⁵⁴ 『旧約聖書』「列王記上」11章3節に対応。

⁵⁵ 対応する『旧約聖書』「列王記上」11章4-8節には、ソロモンが女たちの影響で他の神々に傾倒したという内容になっているが、そこには、似姿を作ったという話は登場しない。似姿を作った経緯については、タバリーが詳細に伝えている(al-Ṭabarī, *Ta'rikh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 587-588; E: 321, n. 252)。

⁵⁶ 『旧約聖書』の対応箇所では、「1部族」となっている。

ではないか。そうすれば、お前の名声がなくなってしまうことはないだろう」と⁵⁷。

ソロモンが^{きん}金で作られ宝石で飾られた玉座に座っていたその時、彼の指輪⁵⁸が手から落ちてしまった。すると、悪魔たちの一人がそれを拾い、自らの手につけると、ソロモンを [64] 玉座から追いやってしまったのである。そして悪魔は玉座に座り、ソロモンから衣を取り上げ、それを身にまとった。ソロモンはどこへともなく歩いて行ったが、羊毛の外套を身につけ、葦を手を持っているだけだった。そして、彼は物乞いをしては、「私はイスラエルの民の王であるが、神が私の王権を剥奪したのだ」と言っていた。しかし、それを耳にした者は彼のことを嘲り笑い、彼の言葉を否定したのであった。そして^{XV}彼は、海にいる漁師たちの所に逗留し、彼らから食べ物を求めていた。一方で、ソロモンの宰相 *sāhib* アーサフ *Āṣaf*⁵⁹ とその他の者たちは、その悪魔の行いを奇妙に感じていた。彼が神の名前を唱えるところを、彼らが目にしなかったためである。そこで悪魔は逃げ出し、その指輪を海の中に投げ捨てた。その時、ソロモンが王権を剥奪されて40日経っていた。40日経った後、彼は海辺をぶらぶらと *sayyār*^{an} ^{XVI}歩いていた^{XVII}。その際に、ある漁師が彼に対して「来なさい、ジンに取りつかれた狂人さんよ。この魚を取りなさい」と言い、既に臭いが変わってしまった魚を彼に与えた。そこでソロモンは、魚を海へと持って行って、洗って腹を割いた。すると、その中には、別の魚がいた。そこでソロモンは、その別の魚の腹を割いた。すると、その中には自らの指輪があったのである。彼は指輪を身につけ、神を賞賛し、神はソロモンに王権を戻した。

40年間⁶⁰、彼はイスラエルの民を支配し続けた。神が説明した形で支配を行い、鳥、ジン、人間を自らに従わせたのである。ソロモンは彼らに、自らのために驚嘆すべき工芸品を作らせ、建築物を建てさせた。そして、全ての命令について、皆が彼に服したのである。その後、彼は死に、ダビデの墓の側に葬られた。ソロモンは、王位に就いた時には12歳で、死んだ時には52歳であった。

⁵⁷ 『旧約聖書』「列王記上」11章9–13節に対応。

⁵⁸ ソロモンが所有していた魔力を秘めた指輪のことで、『旧約聖書』には登場せず、その後に生まれた伝承に登場する。ここでは指輪を落としたという形で伝えられているが、タバリーは、ソロモンが身体を浄める際に指輪を預かっていた彼の愛妾が、ソロモンの姿をして現れた悪魔に指輪を渡してしまったという形で伝えている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, pp. 589–590, 592)。『クルアーン』38章34節の「また、われらはかつてソロモンに試練を与え、彼の高御座の上に一体の肉体を投じ、それから、彼は回帰した」という記述がこの事件を暗示したもの（一体の肉体は悪魔、回帰したは玉座に復帰した）だとする解釈もある (J. Walker & [P. Fenton], “Sulaymān b. Dāwūd,” *ET*²; E: 321, n. 253; 中田考監修、中田香織・下村佳州紀訳『日亜対訳クルアーン』(作品社、2014年) pp. 487–488, n. 1635)。

⁵⁹ イスラーム教徒の伝承でソロモンの宰相とされる人物 (R. Tottoli, “Āṣaf b. Barakhyā,” *ET*³)。

⁶⁰ 『旧約聖書』「列王記上」11章42節、「歴代誌下」9章30節に「ソロモンがエルサレムで全イスラエルを治めたのは40年であった」とあり、統治期間は一致している。タバリーは、統治期間に言及せず、彼の寿命を50余年としている (al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 597)。

ソロモンの子レハブアム Riḥab'am^{XVIII 61}とその後の諸王

ダビデの子ソロモンが死ぬと^{XIX}、ソロモンの子レハブアムが王となった⁶²。すると、イスラエルの民の諸支族は彼の許に集まり、彼に対して言った。「貴方の父は我らを酷使し、我らを過酷な隷属状態に置きました。貴方は今こそ、我ら〔の負担〕を軽くして下さい」と。すると、レハブアムは彼らに対して言った。[65]「今日のところは私の許から去りなさい。そして、3日後に私の許に帰って来なさい」と。そこで、彼らは彼の許から去った。すると、レハブアムは、彼の父に仕えていた長老たちと相談し^{XX}、彼らに対して「お前たちはどう思うか」と言った。彼らは、「我らはこのように思います。イスラエルの民に対して良い返事をし、彼らに対して優しい言葉をおかけなさい。そうすれば、今日から貴方は彼らの王となるでしょう」と答えた。しかし、彼はイスラエルの民の長老たちの言葉を聞かず、ともに育った若者たちと相談した。彼らは彼に対して言った。「彼らの振舞いが貴方にとって適切になるように、彼らに対して厳しい言葉をおかけなさい。まさに彼らの振舞いが貴方の父にとって適切であったように」と⁶³。

そして3日目になると、彼らは彼の許に集まり、彼らが彼に対して言ったことについて尋ねた。すると、彼は彼らに対して答えた。「私の小指は私の父の親指⁶⁴よりも重いのだ」と。彼が彼らに対してこのように言うと、彼らは彼の許を去り、それぞれの村に散って行った。こうして、イスラエルの民の中で、彼の許には、ユダ支族とベニヤミン支族以外は残らなかった。一方で、10の^{XXI}支族は、ネバト Nābāt^{XXII}の子ヤロブアム Yūrab'am^{XXIII 65}を自らの王とした。彼は、ソロモンから逃れてエジプトに行っていた。しかし、イスラエルの民がソロモンの子レハブアムと仲違いすると、彼は戻って来た。ソロモンの子レハブアムは、ユダ支族とベニヤミン支族から1千人の男たちを集め、ネバトの子ヤロブアムとその一党と戦おうとした。しかし、神が預言者シェマヤ Sama'ya^{XXIV}に対して啓示を下した。「レハブアムとその一党に、イスラエルの民と戦ってはならないと言いなさい」と。すると、彼らはその言葉を聞き入れ、去った⁶⁶。レハブアムの治世は17年間であった⁶⁷。

⁶¹ ユダ王国初代国王（在位前926–前910）。ソロモンの後継者となったが、続く記事にあるように、彼に従ったのはユダ支族とベニヤミン支族のみであった（A. Jepsen+石田友雄「レハベアム」『旧約新約聖書大事典』）。

⁶² 『旧約聖書』「列王記上」11章43節、「歴代誌下」9章31節に対応。

⁶³ 『旧約聖書』「列王記上」12章3–11節、「歴代誌下」10章3–11節に対応。

⁶⁴ 『旧約聖書』では、「腰」とされている。

⁶⁵ 分裂後最初のイスラエル王国の国王（在位前927/6–前907）。ソロモンの死の前年に反乱を起こしたが、鎮圧され、エジプト王の許に逃れていた。ソロモンの死後に帰還し、イスラエル諸部族により王に推戴された（A. Jepsen + 山田雅道「ヤラベアム」『旧約新約聖書大事典』）。

⁶⁶ 『旧約聖書』「列王記上」12章21–24節、「歴代誌下」11章1–4節に対応。ただし、1千人ではなく、18万人の戦士が招集されたとされる。

⁶⁷ 『旧約聖書』「列王記上」14章21節でも同様に、彼の治世は17年間だとされている。タバリーも同様に、17年間としている（al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 619）。

ネバトの子ヤロブアムが、パランの山地Jabal Fārān⁶⁸から、10の支族の王となった。すると、イスラエルの民は言った。「まことに我らは、我らの犠牲を神に捧げることを希望しております」と。しかし、ヤロブアムは、彼らがエルサレムに上り、ユダ支族Āl Yahūdā^{XXV}が彼らの心をつかみ、彼らがユダ支族の支配下に入ることを嫌って言った。「お前たちに行く必要などはない。私がお前たちのために祭壇を設けようではないか」と。そこで、彼は祭壇を設けて、そこに金の子牛を作った⁶⁹。すると、イスラエルの民の預言者⁷⁰が彼の許にやって来て、彼に訓戒を与えた。そこで、ヤロブアムは自らの手を彼の方に伸ばしたが、その手は干乾びてしまった。彼は預言者に対して「私の手が元に戻るように神に祈ってください」と言った。そこで、預言者が彼のために祈願すると、彼の手は元に戻った⁷¹。しかし、ヤロブアムは己の（信仰の）道に従い続け、そこから戻ることはなかった。そして、神が、ヤロブアムとその一党のすべてを滅ぼし、彼を殺したのであった。彼の治世は20年間であった⁷²。

その後、レハブアムの子アビヤム Abiyām^{XXVI} ⁷³が王となり、彼の父と同じ道を歩み、数々の恥知らずな行いをし、醜悪な所業に手を染めた⁷⁴。そこで、神は彼の寿命を断ち切った。彼の治世は3年間であった⁷⁵。

その後、アサ Asā^{XXVII} ⁷⁶が王となった。彼は神への服従を示し、姦通を禁じ、姦通や他の罪al-

⁶⁸ パランの山地は、『旧約聖書』によると、一つにはイスラエルの民が荒野の放浪の途中に通った一地方でシナイの北、あるいは、カデシの南に位置する場所、もう一つには、その方向からヤハウエがやってくる場所で、ペトラの80キロメートル西にあたる場所とされる（K. H. Bernhardt + 木幡藤子「パラン」『旧約新約聖書大事典』）。しかし、ここではどちらとしても文脈と合わない。また、ヤーカートは「『律法』に記されているメッカの山々の一つ」としているが（Yāqūt, *Mu'jam al-Buldān*, 5 vols., Beirut: Dār al-Šādir, 2015, vol. 4, p. 225）、これもこの部分では意味が通らない。

『七十人訳聖書』「列王記上」12章24節では、該当部分にヘブライ語聖書にはない記述が挿入されており、12章24b節において、「エフライムの山地からの者で、ソロモンのしもべ。彼の名前はイエロブアム」とあるため、この部分のテキストがいずれかの段階で変形したものだと考えられる。なお、英訳では、『旧約聖書』「列王記上」12章25節の記述から、この山をエフライム山地の誤りとしている（E: 322, n. 256）。

⁶⁹ 『旧約聖書』「列王記上」12章26–32節に対応。

⁷⁰ 『旧約聖書』「列王記上」13章1節では無名の預言者だとされる。

⁷¹ 『旧約聖書』「列王記上」13章1–6節に対応。

⁷² 『旧約聖書』「列王記上」14章21節では、彼の治世は21年間だとされている。

⁷³ ユダ王国の国王（在位前910–前908）（A. Jepsen + 月本昭男「アビヤ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁷⁴ 『旧約聖書』「列王記上」15章3節に「彼は、彼の父が先に犯したすべての罪を犯し」とある。

⁷⁵ 『旧約聖書』「列王記上」15章1–3節に対応。また、アビヤムの事績は『旧約聖書』「歴代誌下」13章に詳しい。「列王記上」15章2節、「歴代誌下」13章1節では同様に、彼の治世は3年間だとされている。

⁷⁶ 『旧約聖書』ヤタバリーでは、アビヤムの子とされている（al-Tabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 619）。ユダ王国の国王（在位前907–前867）（A. Jepsen + 月本昭男「アサ」『旧約新約聖書大事典』）。彼が追放した母というのは、ダビデの三男アブサロムの孫娘（『旧約聖書』では娘となっているが誤り）マアカ（『旧約聖書II歴史書』「列王記上」p. 416, p. 417, nn. 4–5参照。ただし、同名の人物はアサの祖母としても登場し、混乱が見られる）。

dhanb^{XXVIII}で罰した。そして、自らの王国の中で^{XXIX}偶像を崇拜していた者たちを追放した。それは、彼の母が偶像を崇拜していることが彼に伝えられた際に、彼女を追放してしまったほどである。また、彼の治世には、エチオピア王malik al-ḤabashaゼラハZārahとインド王malik al-Hindがエルサレムに攻め込んで来た⁷⁷。すると、神は罰をもたらし、ゼラハとインド王を滅ぼした。アサの治世は40年間^{XXX}であった⁷⁸。また、アサが彼らを殺害すると、イスラエルの民はインドの人々aṣḥāb al-Hindの武器に使われていた木材を、7年間に亘って燃料として用いたとも言われている。

それから彼の後に王となったのは、彼の子ヨシャファトYahūshāfat^{XXXI}⁷⁹であった。彼は彼の父と同じ道を歩み、敬虔で誠実であった。彼は10の支族の王ともなり、全てのイスラエルの民が満足する者marḏīであった。彼の治世は25年間^{XXXII}であった⁸⁰。

それから彼の後に王となったのは、彼の子イエホラムYūrām^{XXXIII}⁸¹であった。彼は信仰を捨て、彼の民は偶像崇拜へと回帰した。彼は妻を迎えたが、彼女は、彼を暴君とし道を誤らせた。彼の治世は40年間であった⁸²。

それから父の後に王となったのは、アハズヤフAḥazyā⁸³であり、彼は父と同じ道を歩んだ。10の支族が既に離反しており、彼らは自分たちの中からイエフYahū^{XXXIV}⁸⁴という名の王を王とした。そこで、イエフはアハズヤフと戦い、アハズヤフの民の[67]大勢を殺した。その後、神はシリア王malik Sūriyaに彼ら（アハズヤフたち）に対抗する力を授けた。そこでシリア王は、彼らに対して同様のことを行ったのである。アハズヤフの治世は1年間であった⁸⁵。

⁷⁷ 「歴代誌」のみに伝えられている伝承。『旧約聖書』「歴代誌下」14章8節では、「クシュ人ゼラハ」という形で登場し、100万の軍隊と300の戦車を率いてアサと戦ったとされている。ただしインド王は登場しない。一方で、イスラーム時代の伝承は様々で、ゼラハをインド王とするものもある（al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 620参照、ライデン版ではZarajと校訂されているが、カイロ版ではZarah。al-Ṭabarī, *Ta'riḫ al-Rusul wa al-Mulūk*, ed. Muḥammad Abū Faql Ibrāhīm, Cairo: Dār al-Ma'ārif, n.d., vol. 1, p. 518）。ヤアクービー自身も、この後の「インドの諸王」の節では、インド王としてゼラハを登場させ、彼がバビロンの地へと侵攻し、そこを越えてイスラエルの民の諸王の許に進んだことを記しており（L: I, 96）、その記述には混乱が見られる。

⁷⁸ 『旧約聖書』「列王記上」15章10–14節、「歴代誌下」14章8–12節に対応。「列王記上」15章10節、「歴代誌下」16章13節では、彼の治世は41年間だとされている。

⁷⁹ ユダ王国の国王（在位前868–前847）。彼は、イスラエルの王と講和したことで知られ、そのことが反映した説明になっている（A. Jepsen + 時田光彦「ヨシャパテ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁸⁰ 『旧約聖書』「列王記上」22章41–43節、「歴代誌下」17章31–32節に対応。彼の治世はこれらでも同様に25年間とされている。

⁸¹ ユダ王国の国王（在位前847–前845）（A. Jepsen + 鍋谷堯爾「ヨラム」『旧約新約聖書大事典』）。

⁸² 『旧約聖書』「列王記下」8章17–18節、「歴代誌下」21章5–6節に対応。彼の治世は8年間で（共同統治の期間も含む）、寿命が40年間であったとされている。

⁸³ ユダ王国の国王（在位前845）（A. Jepsen + 月本昭男「アハジヤ」）。

⁸⁴ イスラエル王国国王（在位前845–前818）（A. Jepsen + 山田雅道「エヒウ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁸⁵ 『旧約聖書』「列王記下」8章25–27節、「歴代誌下」22章2–4節に対応。彼の治世はこれらでも同様に1年間とされている。

それからオムリ‘Umri^{XXXV}の娘アタリヤフ‘Atlāyā^{XXXVI}⁸⁶が王となった。彼女はダビデの子孫を殺害し、その結果、ダビデの末裔のうちで生き残ったのは、ヨアシュYu‘āsh^{XXXVII}⁸⁷という名の少年ghulāmただ一人であった。父方のおじの一族の女性、すなわちイエホシェバYūshib^{XXXVIII}という名の父方のおば^{XXXIX}が彼を連れ出し、育てていたのである。アタリヤフ^{XL}は墮落し、数々の恥知らずな行いをし、その国は腐敗した。イスラエルの民は祭司イエホヤダYūyada^{XLI}⁸⁸の許に集まり、彼女が彼らに対して行っていることについて、彼に不満を訴えた。かくして彼らは結集し、彼女を殺害した。彼女の治世は7年間であった⁸⁹。

アタリヤフの後に王となったのは、ダビデの一族のうちで生き残ったヨアシュという名の少年であった。王位に就いた時、彼は7歳であった⁹⁰。イスラエルの民の諸事は正しくなり、公正が彼らの中に現れ、数々の恥知らずな行いは取り除かれ、彼らは偶像崇拜をやめた。その後、ヨアシュは晩年に不正を行うようになり、殺戮を実行した。それは、祭司の子どもたちを殺し、そして、彼を王位に就けた祭司イエホヤダの子どもを殺してしまったほどである⁹¹。その後、彼は死んだ。彼の治世は40年間⁹²であった。彼は、エルサレムの城壁を40ズイラーウ⁹³破壊し、エルサレムにあった全てのものを略奪した^{XLII}⁹⁴。

それから彼の後に王となったのはアマツヤフAmaṣiyā⁹⁵であった。彼は、その治世の初めにはヨアシュのやり方を真似た⁹⁶。その後、不正を行い、圧政を行うようになった。彼の治世は27年間であった⁹⁷。

⁸⁶ オムリはイスラエル王国の国王（在位前878–前871）。彼の娘アタリヤフは、イスラエルとユダの間で講和が結ばれた際に、当時ユダ王国の王太子であったイエホラムと結婚し、アハズヤフを生んだ（A. Jepsen + 石田友雄「オムリ」；A. Jepsen + 月本昭男「アタリヤ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁸⁷ ユダ王国の国王（在位前840–前801）。アハズヤフの子（A. Jepsen + 山田雅道「ヨアシ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁸⁸ アハズヤフの姉妹でヨアシュのおばにあたるイエホシェバと結婚した祭司長。彼は自らの家に匿っていたヨアシュを即位させた（A. Jepsen + 荒井章三「エホヤダ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁸⁹ 『旧約聖書』「列王記下」11章1–21節、「歴代誌下」22章10–23節に対応。これらでは彼女の治世は6年間だとされている。

⁹⁰ 『旧約聖書』「列王記下」12章1–2節、「歴代誌下」24章1–2節に対応。

⁹¹ 『旧約聖書』「歴代誌下」24章22節に対応。

⁹² 『旧約聖書』「列王記下」12章2節、「歴代誌下」24章1節に対応。タバリーとマスウーディーも同様にその治世を40年間としている（al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 637; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab wa Ma'din al-Jawhar*, ed. Ch. Pellat, Beirut: Manshūrāt Jāmi'at al-Lubnāniya, 1965–1979, vol. 1, p. 65）。

⁹³ 『旧約聖書』では400アンマ。

⁹⁴ 『旧約聖書』「列王記下」14章13–14節、「歴代誌下」25章23–24節に対応。ここでは、『旧約聖書』に登場するもう一人のヨアシュ（イスラエル王国の国王、在位前802–前787）の事績と混同されている（E: 324, n. 262）。

⁹⁵ ユダ王国の国王（在位前800–前786）（A. Jepsen + 月本昭男「アマジヤ」『旧約新約聖書大事典』）。

⁹⁶ 『旧約聖書』「列王記下」14章1–3節、「歴代誌下」25章1–2節に対応。

⁹⁷ 『旧約聖書』では、彼の治世は29年間だとされている。

それからアマツヤフの子ウジヤフ‘Uziyā⁹⁸が王となった。彼の治世には預言者イザヤ Isha’yāがいた。ウジヤフは、神への崇拜と服従をよく行ったが、彼は、香炉を手にとって神殿に入ってしまった。その行為は、祭司たちにのみ許されていた。そこで、神は彼を罰し、彼は白癩bariṣa⁹⁹になった¹⁰⁰。さらに、神は預言者イザヤを罰した。というのも、彼は[68]ウジヤフがそのようにすることを止めなかったためである。かくして神は、ウジヤフが死ぬまで、イザヤから預言者位を取り上げた¹⁰¹。ウジヤフの治世は52年間であった。

それから、父(ウジヤフ)が白癩になると^{XLIII}、ヨタムYūtām^{XLIV} ¹⁰²が王となった。彼の治世は16^{XLV}年間であった¹⁰³。

それから彼の子アハズ Ahāz¹⁰⁴が王となった。彼は不信仰者となり偶像を崇拜した。そこで、神はバビロンの王ティグラト・ピレセル Bila‘qīs¹⁰⁵に彼を支配させた。そこで彼は、アハズを捕え奴隷とし、彼に税jizyaを課した。また、パレスチナにあった10の支族の町^{XLVI}、すなわちサマリア Sabastiya^{XLVII} ¹⁰⁶を破壊し、その町の人々を捕えた。そして、彼らを連れてバビロンの地に入った。その後、彼はサマリアに自らの民を派遣し、人を住まわせて再建した。彼らは、パレスチナとヨルダンにいるサマリア人 Sāmira¹⁰⁷と呼ばれている人々である。彼らがそこに住まうと、神は獅子たちに彼らを支配させた。その後、アロンの子孫のイスラエルの民の祭司の男を派遣し、彼らにイスラ

⁹⁸ ユダ王国の国王(在位前787–前736)(A. Jepsen + 石田友雄「ウジヤ」『旧約新約聖書大事典』)。

⁹⁹ 白癩については、「『歴史』訳注(2)」p. 136, n. 170参照。

¹⁰⁰ 『旧約聖書』「列王記下」15章1–5節、「歴代誌下」26章1–20節に対応。

¹⁰¹ 『旧約聖書』「イザヤ書」には、イザヤはウジヤフの治世に生きていたこと(1章)、ウジヤフ逝去の年に召命されたこと(6章)は記されているが、預言者位の剥奪については記されていない。『黄金の牧場』では、ウジヤフとイザヤの間に多くの伝承が残されていると明記され(al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 66)、『旧約聖書』以外の伝承が流布していたようである。

¹⁰² ユダ王国の国王(在位前775/6–前742/1)。父が病気であったため、彼が父の存命中から統治を行っていた(E. Jenni + 木幡藤子「ヨタム」『旧約新約聖書大事典』)。

¹⁰³ 『旧約聖書』「列王記下」15章32–33節、「歴代誌下」27章1節に対応。

¹⁰⁴ ユダ王国の国王(在位前735/4–前727)(A. Jepsen + 月本昭男「アハズ」『旧約新約聖書大事典』)。

¹⁰⁵ アッシリア王ティグラト・ピレセル3世(在位前745–前727)。バビロニア王としての即位名はプル(G. Wallis + 中田一郎・横倉泉「プル」『旧約新約聖書大事典』)。アラビア語の読み方はテキストによって異なり、例えば、『黄金の牧場』では、Fal‘asrと校訂されている(al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 66)。

¹⁰⁶ 『旧約聖書』「列王記上」16章24節によると、イスラエル王国のオムリによって建設され、首都とされたという。ヘレニズム時代にはセバステイエと呼ばれ、それがアラビア語での名称にも残っている(K. Elliger+城崎進・松浦大、「サマリア」『旧約新約聖書大事典』; Yāqūt, *Mu‘jam al-Buldān*, vol. 3, p. 184)。

¹⁰⁷ 『旧約聖書』「列王記下」17章では、アッシリアによって、サマリアの住民が捕虜として連れ去られた後に、アッシリアの支配地域の各地から人々が移住し、混交的な宗教形態が生じたとされる。かつては、この記述が後のサマリア人の宗教の起源だと考えられてきたが、現在では否定されている(土岐健治「サマリアびと」『旧約新約聖書大事典』)。

エルの民の宗教を説かせた^{XLVIII}108。獅子たちは彼らの許を去り、彼らはサマリア人となった。すると、彼らは言った。「我らはモーセ以外の預言者を信仰することはないし、『律法』の中にあるもの以外^{XLIX}は認めない」と。そして、ダビデの預言者位を拒絶し、甦りと復活 al-ba‘th wa al-nushūr を否定し、(それ以外の)人々と付き合うことと彼らと交わる事、彼らから得たものを食べる事と死者を運ぶことを忌避した。死者を運ぶ者は、7日間隔離される。荒野で隔離され人々と交わることはない。それから身を浄めるのである。このように、自らにとって合法でないものを食べることを忌避した。また、月経を迎えている女性を自らの家に迎えなかった。彼らは、アロンの子孫を自らの長 ra'īs とし、その者を [69]「ライース al-ra'īs」と呼び、『律法』を^L継承している。そして^L彼らは、パレスチナ地域 jund Filastīn 以外の^{LII}土地に属する地には住まわなかった。アハズの治世は16年間であった¹⁰⁹。

アハズの後に王となったのは、息子ヒゼキヤ Hizqīl¹¹⁰であった。彼は神をよく崇拜し、偶像を破壊し、その神殿 buyūt を打ち壊した。また、彼の治世には、バビロンの王であるサルゴンの子センナケリブ Sannaḥārīb b. Sarāṭīm¹¹¹がいた。彼はエルサレムに進軍し、残っていた諸支族を捕虜とした¹¹²。そこで、ヒゼキヤは、(センナケリブが)帰還するという条件で、300キントール¹¹³の金^{LIII}を彼に賄賂として与え¹¹⁴、彼はそれを取った。その後、センナケリブは裏切った。彼がそのようなすると、預言者イザヤとヒゼキヤは、センナケリブを呪うように、神に対して祈願した。すると神は、彼らの祈願を聞き入れ、センナケリブの一党に殺害をもたらした。そして一刻のうちに、彼らのうち18万5千人が殺された¹¹⁵。センナケリブは敗れて帰還し、バビロンに向かった。そこで、彼の子の手で残虐なやり方で殺された。神は預言者イザヤに対して、ヒゼキヤに、「お前は死に行く。遺言を遺しなさい」と伝えるように命じた。神がそのことを伝えると、ヒゼキヤは、(神が)彼の後に王となる子を彼に授けるまで寿命を増やしてもらえるように神に祈願した。神は、彼の寿命を15年間増やした。かくして、彼には息子が生まれた。ヒゼキヤの治世には、太陽が上昇地点

¹⁰⁸ 『旧約聖書』「列王記下」17章24–28節に対応。

¹⁰⁹ 『旧約聖書』「列王記下」16章2節、「歴代誌下」28章1節に対応。

¹¹⁰ ユダ王国の国王(在位前725–前697)(A. Jepsen + 山我哲雄「ヒゼキヤ」『旧約新約聖書大事典』)。多くの場合 Hizqiyā と綴られる。Hizqīl というのは預言者エゼキエルのことで、書写の過程で両者が混同されてしまったものと考えられる(E: 325, n. 271)。

¹¹¹ アッシリア王(在位前705–前681)。彼の父はサルゴン2世(在位前722–前705)である(山田重郎「センナケリブ」『古代オリエント事典』)。

¹¹² 『旧約聖書』「列王記下」18章13節に対応。

¹¹³ 重量単位。1キントールはシリアでは192.4キログラム、イラクでは327.5キログラム(Hinz, *Islamische Masse und Gewichte*, pp. 24–27)。

¹¹⁴ 『旧約聖書』「列王記下」18章14節に対応。『旧約聖書』では「キカル」という単位になっている。

¹¹⁵ 『旧約聖書』「列王記下」19章35節に対応。

matla¹¹⁶の方に五つの宮 burūj¹¹⁷戻った¹¹⁷。ヒゼキヤの治世は27年間であった¹¹⁸。

それからヒゼキヤの後に王となったのは、ヒゼキヤの子マナセ Manashshā¹¹⁹であった。彼の治世に、イスラエルの民は不信仰者となった。彼は不信仰者となり、偶像を崇拜し、イスラエルの民の中で最も凶悪な王であった。彼は、偶像のために礼拝所 masjid を建て、四つの顔の偶像を受け入れた。そこで、イザヤは彼を制止した。そして、マナセは彼について命じた。[70]すると、イザヤの頭から両脚まで鋸で裂かれたのである¹²⁰。そこで神は、ルームの王クスタンティーン Qusṭanṭīn¹²¹にマナセを支配させた。クスタンティーンは彼と戦い、彼を捕虜とした。マナセはしばらくの間、捕われの身であった。それから彼は神に対して悔悟し、神は彼を王位に戻した。かくして彼は、偶像を破壊し、その神殿を打ち壊した。彼の治世は55年間¹²²、彼が捕われていたのは20年間であった。

それからマナセの子アモン Amūn¹²³が王となった。彼は偶像を元に戻し、その数を増やした。彼の治世は16年間であった¹²⁴。

それから彼の後に王となったのは、彼の子ヨシヤフ Yūshiyā¹²⁵であった。彼は神をよく崇拜し、偶像を破壊し、その寺院を打ち壊し、その番人たちを殺し、火をつけた。公正さと神をよく崇拜すること、そして行いの素晴らしさにおいて、彼はダビデやソロモンに似通っていた。彼の治世は30年間であった¹²⁶。

それから彼の子エホアハズ Yahū'akhaz¹²⁷が3ヶ月間王となった。その後、エジプトの王である

¹¹⁶ 太陽が昇る場所のこと (D. A. King, "al-Matla'," *ET*)。

¹¹⁷ 『旧約聖書』「列王記下」20章11節にある、「ヤハウエは日時計の影、すなわちアハズの日時計に落ちた影を10度後に戻した」という時間を戻したという奇跡に対応した記事だと考えられる。ここでは、黄道十二宮のうち五つの宮戻った、すなわち、10時間戻ったと解釈できる (E: 326, n. 275)。

¹¹⁸ 『旧約聖書』「列王記下」18章2節、「歴代誌下」29章1節では、彼の治世は29年間だとされている。

¹¹⁹ ユダ王国の国王 (在位前696–前642) (J. A. Soggin + 小田島太郎「マナセ」『旧約新約聖書大事典』)。

¹²⁰ 『旧約聖書』には記述はないが、1世紀後半に成立したとされる『イザヤの殉教と昇天』では、イザヤはマナセにより鋸で裂かれたと記されている (B. Reicke + 加山久夫「イザヤの殉教と昇天」『旧約新約聖書大事典』; 『聖書外典偽典』別巻補遺II、教文館、1982年、pp. 187–188)。

¹²¹ ローマ帝国が存在しない時代の話で、大きな時代錯誤が確認できる。ここに登場するルームの王クスタンティーンが誰を指しているのかは不明。この時代について、イブン・クタイバ『知識の書』ではルームの王が侵入したことが記録され、『黄金の牧場』の対応箇所でも同名のルームの王が登場するなど (Ibn Qutayba, *al-Ma'ārif*, p. 46; al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 67)、初期イスラーム時代の歴史家にとっては一般的な伝承となっていた。『旧約聖書』「歴代誌下」33章11節では、クスタンティーンは「アッシリア王の軍の長たち」となっている。この人物に相当する人物は、『歴史』の後出のローマに関する記事には登場しない (L: I, 161–178)。

¹²² 『旧約聖書』「列王記下」21章1節、「歴代誌下」33章1節に対応。

¹²³ ユダ王国の国王 (在位前641–前640) (A. Jepsen + 月本昭男「アモン」『旧約新約聖書大事典』)。

¹²⁴ 『旧約聖書』「列王記下」21章19節、「歴代誌下」33章21節では、彼の治世は2年間だとされている。『旧約聖書』では、家臣たちに殺害されたとされる。

¹²⁵ ユダ王国の国王 (在位前639–前609) (B. Reicke + 小田島太郎「ヨシヤ」『旧約新約聖書大事典』)。

¹²⁶ 『旧約聖書』「列王記下」22章1節、「歴代誌下」34章1節では、彼の治世は31年間だとされている。

¹²⁷ ユダ王国の国王 (在位前609) (A. Jepsen + 菊地純子「エホアハズ」『旧約新約聖書大事典』)。

はこう
跛行のファラオ Fir‘awn al-a‘raj¹²⁸ が彼を捕え、彼の国に税 kharāj を課し、そこに自らの側の王¹²⁹ を置いた。そして、イエホアハズを捕え、彼をエジプトに連れて来た。彼はその地で死んだ¹³⁰。

それから彼の後に王となったのは、彼の兄弟イエホヤキム Yūqīm^{LV 131} であった。彼は、預言者ダニエル Dāniyāl の父であった¹³²。彼の治世に、バビロン王のネブカドネツアル Bukht-nassar¹³³ がエルサレムへと遠征を行った。彼は、イスラエルの民の中で殺戮を行い、彼らを捕え、バビロンの地に連れて行った。それからエジプトの地に進軍し、はこう
跛行のファラオを殺し、その地を支配した^{LV1}。ネブカドネツアルは、『律法』に加えて、聖所の中にあった諸預言者の書 kutub al-anbiyā’ を取り、それらを井戸の中に落とし、その上に炎を放ち、埋めた。

その当時、預言者エレミヤ Irmiyā がいた。彼は、ネブカドネツアルの到来を知ると、聖櫃を取り、誰にも知られていない洞窟の中にそれを隠した。エレミヤを除いては、ネブカドネツアルから逃れた者はいなかった。ネブカドネツアルがバビロンの地に連れて行った者たちの数は [71] 1万8千人で、その中に、1千人の預言者がいた¹³⁴。その時の彼らの王は、イエホヤキム^{LVII} の子イエコンヤ Yuhanyā¹³⁵ であった¹³⁶。(現在) イラクにいるユダヤ教徒は彼らに由来している。また、次のように言われている。預言者エレミヤは「おお神よ、私は誰よりも貴方の公正さを知っています。それなのに、何のために、貴方はネブカドネツアルにイスラエルの民を支配させたのですか」と言った。すると、神はエレミヤに対して啓示を下した。「私の僕たちが私に齒向かってきたために、私は、私の悪しき被造物どもをもって、彼らに復讐したのである」と。

¹²⁸ 第26王朝第3代君主ネコ2世(在位前610–前595)。『旧約聖書』「列王記下」23章29節において「ファラオ・ネコ」という名前で登場するエジプト王。「はこう
跛行のファラオ」という異名は、「ネコ」という単語が持つ n-k-y という意味に由来するものだと考えられている (A. J. Wencinck & G. Vajda, “Fir‘awn,” *EF*²; E: 327, n. 279)。タバリーは、「切断され肢体が不自由なファラオ Fir‘awn al-ajda’ al-muq‘ad」としている (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p.643)。

¹²⁹ 『旧約聖書』では、イエホアハズの兄弟エルヤキムだとされる。

¹³⁰ この段落は、『旧約聖書』「列王記下」23章31–34節、「歴代誌下」36章1–4節に対応。

¹³¹ ユダ王国の国王(在位前609–前598)。即位後、エルヤキムからイエホヤキムに名を改めた (A. Jepsen + 荒井章三「エホヤキム」『旧約新約聖書大事典』)。

¹³² 『旧約聖書』「ダニエル記」1章で、ダニエルは「王の血を引く門閥」の一人として紹介されており、これに由来する評価だと考えられる (E: 327, n. 280)。

¹³³ 新バビロニア王国第2代君主(在位前604–前562)。前605年に父王に従ってエジプト軍をカルケミシュにおいて撃破した。エジプト軍との戦いの最中に父王が亡くなると、バビロンに帰還して王位を継いだ。その後、ユダ王国を征服するなど、新バビロニア王国の最盛期を築き上げた (鶴木元尋「ネブカドネツアル」『古代オリエント事典』)。

¹³⁴ バビロン捕囚の人数については、タバリーは7万人、マスウーディーはヤアクービーと同じ1万8千人という数字をあげるが、預言者の数についての言及はない (al-Ṭabarī, *Ta’rīkh al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 666; al-Mas‘ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 68)。一方、『旧約聖書』「エレミヤ書」52章28–30節では合計4千6百人とされる。

¹³⁵ ユダ王国の国王(在位前598–前597) (A. Jepsen + 山我哲雄「エホヤキン」『旧約新約聖書大事典』)。

¹³⁶ 『旧約聖書』「エレミヤ書」24章1節に対応。

イスラエルの民^{LVIII}は、ネブカドネツアルの支配下で囚われの身であり続けた^{LIX}。その後、彼¹³⁷は、シェアルティエル Saltāyil¹³⁸の娘のスイーハト Sīhat という名の女性と結婚した。すると彼女は彼に対して、イスラエルの民の人々を彼らの国に戻すように求めた。イスラエルの民が彼らの国に帰還すると^{LX}、彼らは、シェアルティエル^{LXI}の子ゼルバベル Zarbābil¹³⁹を自らの王とした。そして、エルサレムの町を作り、聖所を築いた。彼は46年間その建設にあたり続けた。彼の治世に、神はネブカドネツアルを雌の獣に変えた¹⁴⁰。彼は7年間¹⁴¹、様々な獣に姿を変えた。その後、一説によれば、彼は神に対して改悛をし、神は彼を人として生まれ変わらせ、その後に死んだとされている。ゼルバベルは、『律法』と諸預言者の書を、ネブカドネツアルがそれらを埋めた井戸の中から取り出した。彼は、燃えていない元の状態で、それらを見つけた。彼は、『律法』と諸預言者の書、そして、それらの慣習 sunan と法 sharā'i' を新たに写した。彼こそが、これらの書を最初に写した人物である。

ところで、イスラエルの民の法 sharī'a は、神の唯一性を信じること tawhīd Allāh、そして、神の友アブラハムの子イサクの子ヤコブの子レビの子ケハトの子アムラムの2人の子、すなわち、モーセとアロンの預言者性 nubūwa を認めることであった。

また、彼らの齋戒 ṣiyām は毎年6^{LXII}日間で、その最初は元日である¹⁴²。彼らは、元日をティシュリーン月¹⁴³1日としている。[72] ティシュリーン月10日に、一日、齋戒を行う¹⁴⁴。それは、2度目の

¹³⁷ ここではネブカドネツアルのことを指していると考えられるが、『黄金の牧場』の対応箇所では、ペルシアの王がイスラエルの民の女奴隷と結婚したとされる (al-Mas'ūdī, *Murūj al-Dhahab*, vol. 1, p. 68)。タバリーも、シェアルティエルを王としたのは、ペルシアの王だとしている (al-Ṭabarī, *Ta'riḥ al-Rusul wa al-Mulūk*, serie 1, p. 688)。英訳では、『宝の洞窟』の記述をふまえて、「彼」というのは、アケメネス朝の創始者キュロス2世 (在位前559–前530) のことだとしている (E: 327, n. 283; Anonymous, *La Caverne des trésors*, pp. 320–321)。

¹³⁸ イエホヤキムの子で、後出のゼルバベルのおじ、あるいは父とされる (A. E. Rūthy + 吉沢ゆう子「シャルテル、サラテル」『旧約新約聖書大事典』)。

¹³⁹ 『旧約聖書』「歴代誌上」3章19節では、シェアルティエルの兄弟ベダヤの子だとされている。これは、ベダヤがシェアルティエルの寡婦と義兄弟結婚したことにより、ゼルバベルの継父になったためだとされる。彼は帰還すると神殿を再建したが、即位したわけではない (B. Reicke + 関根清三「ゼルバベル」『旧約新約聖書大事典』)。

¹⁴⁰ 『旧約聖書』「ダニエル書」4章28–30節に対応。

¹⁴¹ 『旧約聖書』「ダニエル書」4章13節、29節に「七つの時代」という文言があり、これは、7年間に相当すると考えられている (『旧約聖書IV諸書』「ダニエル書」p. 677, n. 3)。

¹⁴² 以下のユダヤ教徒の慣習については、アダン C. Adang による英語訳もある (Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible*, pp. 71–75)。アダンはアラビア語文献のみを考察の対象としたが、普遍史書ガルディーザー Gardīzī 『歴史の装飾 *Zayn al-Akḥbār*』 (1050–53年) などペルシア語文献にも、ユダヤ教徒の祝祭に関する詳細な説明がある (Gardīzī, *Tārīkh-i Gardīzī*, ed. 'A. Ḥabībī, Tehran: Dunyā-yi Kitāb, 1984/5, pp. 469–489)。以下の暦と祭日の情報については、岡田芳朗ほか編『暦の大事典』(新装版)、朝倉書店、2014年を参照した。

¹⁴³ ここで登場する暦については、『歴史』訳注(1) p. 134参照。現行のユダヤ教暦1番目の月ティシュリーン・アルアウワル月のことで、新年は現行月の9~10月に相当する。

¹⁴⁴ 現在ヨーム・キップールと呼ばれる大贖罪日で、『旧約聖書』「レビ記」16章29–31節で規定されている。

板¹⁴⁵がアムラムの子モーセに下された日である。次に、カーヌーン・アルアーヒル月10日^{LXIII}に、一日、齋戒を行う。それは、神がイスラエルの民をハマンから救い出した日である¹⁴⁶。次に、タムーズ月17日に、一日、齋戒を行う。それは、モーセがシナイ山から下りた日である¹⁴⁷。次に、アープ月⁹LXIV日に、一日、齋戒を行う。それは、神殿bayt al-maqdisが破壊された日である¹⁴⁸。次に、ティシュリー月3日に齋戒を行う。それは、アヒカムAkhīqām^{LXV}の子ゲダルヤQadaryā¹⁴⁹が殺された日^{LXVI}である¹⁵⁰。

また、彼らには1年に四つの祭'idがある。種入れぬパンの祭'Id al-Faṭīr¹⁵¹。それは、モーセがイスラエルの民とともにエジプトを出た際に、パン生地を携えていたものの、発酵させずに、酵母を入れないうま食べた日である。それは、ニーサーン月15日で、7日間である。次にハズイーラーン月¹⁵²16日¹⁵³の祭がある。それは、モーセに『律法』が下された日である。そのために、それは彼らにとって、大きな祭りの日である。次に、ティシュリー月1日の祭がある。それは、彼らにとっての元日である。次に、ティシュリー月15日の祭がある。それは、^{かりいお}仮庵mizallaの祭である。その意味は次のとおり。神がモーセに命じて、イスラエルの民に、^{かりいお}仮庵'arīshを棗椰子の葉と枝で建てるように命じさせた^{LXVII}。それで彼らは8日間、彼らの礼拝所kanā'isの中で、棗椰子の葉と枝で作られた^{かりいお}仮庵zālālātを使い続けている¹⁵⁴。

彼らが行う礼拝ṣalawātは3回、すなわち、早朝ghadāの礼拝、日没ghurūb al-shamsの礼拝、夜ba'da al-ghrūbの礼拝である。彼らのうちの一人が礼拝を行うために立つ時には、その^{かかと}両踵を揃え、右手を左肩に、左手を右肩に置く。そしてその者は沈黙して、跪拝抜きの5回のラクアrak'a¹⁵⁵を行い、その最後に一度の跪拝sajdaを行う。最初の礼拝の際には [73] ダビデの『詩篇Mazāmīr』を詠つ

¹⁴⁵ 『旧約聖書』「出エジプト記」34章1-4節に記されている、シナイ山で再度書き記された石板のこと。この逸話については、ヤアクービーは言及していない（『歴史』訳注(2) p. 141, n. 215）。

¹⁴⁶ アサラー・ベテヴェートの断食日。この日は、ネブカドネツアルによるエルサレム包囲の日（『旧約聖書』「列王記下」25章1節）。ハマン（『歴史』訳注(2) p. 136, n. 171も参照）から救い出された日は、アザール月14日のプリム祭であり（『旧約聖書』「エステル記」9章19節）、ここでは、これらが混同されて説明されている。

¹⁴⁷ シャヴァ・アサル・ベタンムーズのことで、エルサレムの城壁がローマ軍に破られたことを記念する日で、断食日ではない。

¹⁴⁸ ティシュア・ベアヴ。第一・第二神殿が破壊されたことを悼む断食日。

¹⁴⁹ エルサレムの有力官僚の家系に生まれる。父はアヒカム、祖父はシャファン。ネブカドネツアルによるエルサレム征服後、ユダの総督に任命された（G. Wallis + 月本昭男「ゲダリヤ」『旧約新約聖書大事典』）。

¹⁵⁰ ツォム・ゲダリヤ（ゲダリヤの断食日）。

¹⁵¹ ペサッハ（過越しの祭）。

¹⁵² 現行のユダヤ教暦9番目の月スイヴァン月のこと。

¹⁵³ 正しくは6日（Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible*, p. 73）。シャヴォートと呼ばれる麦の収穫祭。

¹⁵⁴ 『旧約聖書』「レビ記」23章33-43節で規定されている。

¹⁵⁵ ラクアについては、『歴史』訳注(3) p. 77, n. 28) ここでは、ユダヤ教徒の礼拝について、イスラーム式の用語を用いて説明されている。

て神を称賛し、日没 maghīb の礼拝の際には『律法』を誦む。その慣習 sunna^{LXVIII} と法 sharā'i' に従い、彼らは、学者たちの書物 kutub 'ulamā'i-him に信を置く。それらは、ヘブライ語 al-'Ibrānīya では……¹⁵⁶と呼ばれる書物である。ヘブライ語は、彼らが渡った 'abarū¹⁵⁷ 際、彼らに現れた言葉である。次のものがヘブライ語の文字の綴り方であり、27文字からなる。



結婚に関する彼らの慣習 sunna は次のとおりである。彼らは、一人の後見人 walī と二人の証人 shāhidayn の立ち会いなくしては結婚しない。処女に対する婚資 muhūr の最低額は200ディルハムで、非処女に対しては100ディルハムであり、それ以下になることはない。彼ら(夫)が(妻を)疎んじるようになった時には離婚は許容 mubāh されるが、それは、証人の立ち会いなくしては行われな

¹⁵⁶ マンチェスター写本、ケンブリッジ写本では、この部分に入るであろう単語が脱落しており、その単語が入るスペースもあいていない (M: 15a; C: 19b)。書写の過程で脱落してしまったものと考えられる。アダンは、ここに入る書名は『タルムード』か『ミシュナ』であろうと推定している (Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible*, p. 74, n. 25)。

¹⁵⁷ この「渡った」という表現は、英訳では「海を渡った」と訳出されており、出エジプトのことを意図したものと解釈されている (E: 329)。一方で、『歴史』の後に成立したイブン・ナディーム Ibn al-Nadīm 『目録 *al-Fihrist*』 (987年) では、この「海を渡った」という表現について、ニムロドの手を逃れたアブラハムがユーフラテス河を渡ったことだと説明される (Muḥammad b. Iṣḥāq al-Nadīm, *Kitāb al-Fihrist*, ed. R. Tajaddud, Tehran: Intishārāt-i Asāfir, 2003, p. 17)。

なお、アラビア語では、ここに登場する「ヘブライ語」という名詞と「渡る」という動詞は、いずれも '-b-r という同じ語根から派生した単語であり (E: 329, n. 295)、ここではそれにより、二つの言葉が関係付けられている。

¹⁵⁸ マンチェスター写本では、この画像のとおり28文字のアラビア語のアルファベットが並び(カーフとラームがない)、その後ヘブライ文字ではない奇妙な文字(あるいは記号)が14?個並んでおり、おそらくは対照表のようになっていたと考えられる。ケンブリッジ写本もこれに準じた形になっている (M: 15a; C: 19b)。『目録』にもヘブライ文字についての説明があり、より完全な対応表のような形になっている写本も残されており (Muḥammad b. Iṣḥāq al-Nadīm, *Kitāb al-Fihrist*, p. 17)、前述の単語の脱落の事例に鑑みて、写本の書写の過程で混乱が生じたものと考えられる。

屠られた獣に関する彼らの慣習 sunna は次のとおりである。彼らは、自分たち [ユダヤ教徒] 以外の者が屠ったものを食べない。屠殺を司る者は、法 *sharā'ī* に通じている。屠殺を行おうとする時はいつでも、そこで用いる小刀 *sikkīn* を祭司の許に持って行く。そして、彼 [祭司] がその刃に満足すると、それをを用いて彼が屠殺を行うことが許される。そうでない場合、それをさらに鋭くするように、あるいは、それ以外の小刀を持って来るように命じるのである。屠殺を行う際には、(小刀が) ぶつかってしまいそうな壁にはそれを近づけない¹⁵⁹。そしてそれを終わると、喉を見る。喉頭蓋が泡を吹いていないのを確認し¹⁶⁰、また、屠殺が水平方向に行われているのを確認した際でも¹⁶¹、肺を見るまでは食べない。そして肺に、悪い所、病気、裂傷、吹出物、腫瘍を確認した際には、その屠られた獣を食べない。肺が健全であれば、脳を見る。そこに病気を確認した際には、食べない。脳が健全であれば、心臓を見る。そこに病気を確認した際には、食べない¹⁶²。もし胃や内臓にある脂肪が健全でも、それを食べず、血管も食べない¹⁶³。食べるのはそれ以外のものである。

彼らの暦は、彼らの計算に従えば、神殿が破壊された日が起点となっており、彼らはそれに従って計算する¹⁶⁴。彼らは毎日、神殿が破壊された日を思い起こし、その日から何日であるのかを確認しなければならない。

¹⁵⁹ 『バビロニア・タルムード』「フリーン篇」15b章16節以下には、屠殺をする際にそこで使われる刃物が壁にぶつかった後に、それで動物を殺した場合についての議論がある。

¹⁶⁰ 『バビロニア・タルムード』「フリーン篇」46b章2節以下には、肺の確認に関する記述がある。そこでは、肺に小さな穴が空いている場合には、それがカシエル (ユダヤ教の戒律で合法とされる状態) ではない、とされることを前提として、そこに唾をつけて、肺が膨らんだ時に、泡が生じた場合、それはカシエルではないと判断するという議論がなされている。

¹⁶¹ ユダヤ教の食餌規定では喉から気管、食道、頸静脈、頸動脈という形で、水平に切ってゆくことが望ましいとされる (H. Rabinowicz, “Shehitah,” *EJ*²)。

¹⁶² 『バビロニア・タルムード』「フリーン篇」42a章3節には、脳の膜や、心臓に穴が開いている場合は、それがカシエルではないとされている。

¹⁶³ ユダヤ教の食餌規定では、胃や腸についた脂肪は、それが古代には祭壇に捧げられていたため、食べてはならないものとされている (『旧約聖書』「レビ記」3章17節、7章23–25節; H. Rabinowicz [& R. M. Geffen], “Dietary Laws,” *EJ*²)。なお、これ以前のヤアクービーのテキストにも、「祭壇に捧げものの脂肪を置くように」と触れられている (L: I, 35; 『歴史』訳注 (2)) p. 139)。

¹⁶⁴ ここで言及されている「神殿の破壊」は、ローマ帝国による第二神殿の破壊であり、中世においては、セレウコス暦、創世紀元暦とあわせて用いられていた ([one of the editors, unnamed], “Chronology,” *EJ*²)。第二神殿の破壊は、ヤアクービーのテキストにおいては、古代イスラエルの民の歴史の文脈では言及されず、ローマの諸王の箇所では言及されている (L: I, 164–165)。

〈校訂注〉

- I ケンブリッジ写本では、ここまでが章題として太字で記されている (C: 16b)。
- II マンチェスター写本では Tu'āb と、ケンブリッジ写本では Turāb となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では Yu'āb と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- III 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では ʾHYK となっており (C: 16b)、これが刊本では u'tiya-ka と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には、u'tiya-ka とあり (M: 12b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- IV 両写本では inna-ka となっているが (M: 12b; C: 16b)、刊本では la-inna-ka と直されている。ここでは両写本に従った。
- V マンチェスター写本では ZRYWN と、ケンブリッジ写本では ZYRYWN となっているが (M: 12b; C: 17a)、刊本では Zābūd と直されている。ここでは刊本に従った。
- VI 両写本では Īnshā となっているが (M: 12b; C: 17a)、刊本では Abīshār と直されている。ここでは刊本に従った。
- VII 両写本では 'Abīd となっているが (M: 12b; C: 17a)、刊本では 'Abdā と直されている。ここでは刊本に従った。
- VIII 両写本では Wādūnīrām となっているが (M: 12b; C: 17a)、刊本では Adūnīrām と直されている。ここでは刊本に従った。
- IX 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では、この単語の多くの文字に識別点がなく (C: 17a)、これが刊本では wazīfa と直されている。当該箇所はマンチェスター写本には、wazīfa とあり (M: 12b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- X 両写本では 'ashr となっているが (M: 12b; C: 17a)、刊本では 'ashara と直されている。ここでは刊本に従った。
- XI 両写本では alladhāni となっているが (M: 13a; C: 17a)、刊本では alladhayni と直されている。ここでは両写本に従った。
- XII 両写本では sunnat-hu となっているが (M: 13a; C: 17a)、刊本では sunan-hu と直されている。ここでは両写本に従った。
- XIII 両写本では qurbīy^{am} となっているが (M: 13a; C: 17a)、刊本では qarīb^{am} と直されている。ここでは両写本に従った。
- XIV 両写本では M'RB となっているが (M: 13a; C: 17a)、刊本では Mu'āb と直されている。ここでは刊本に従った。
- XV 両写本では wa となっているが (M: 13a; C: 17b)、刊本では fa と直されている。ここでは両写本に従った。
- XVI 両写本では مراء となっているが (M: 13a; C: 17b)、刊本では hā'ir^{am} idh と直されている。ここでは sayyār^{am} idh と読んだ。
- XVII 両写本では la-yamshī となっているが (M: 13a; C: 17b)、刊本では yamshī と直されている。ここでは両写本に従った。
- XVIII この人名は両写本では一貫して RHY'M となっているが (M: 13a; C: 17a)、刊本では Riḥab'am と直されている。ここでは刊本に従った (これ以降も同様)。
- XIX ケンブリッジ写本ではこの単語までが章題として太字で記されている (C: 17b)。このようにケンブリッジ写本には章題の行のすべてを太字にする傾向があるが (赤字としている場所もある)、以後マンチェスター写本とのこの点についての異同については逐一言及しない。
- XX 両写本では fa-stashāra となっているが (M: 13b; C: 17b)、刊本では fa-stashā と直されている。ここでは両写本に従った。
- XXI 両写本では al-'ashīra となっているが (M: 13b; C: 17b)、刊本では al-'ashara と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXII マンチェスター写本では نابت と (M: 13b)、ケンブリッジ写本では نابت となっているが (C: 17b)、刊本では Nābāt と直されている。ここでは刊本に従った (これ以降も同様)。
- XXIII 両写本では Thūrab'am となっているが (M: 13b; C: 17b)、刊本では Yūrab'am と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXIV 両写本では اشعيا となっているが (M: 13b; C: 17b)、刊本では Sama'yā と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXV 両写本では ilā となっているが (M: 13b; C: 17b)、刊本では āl と直されている。ここでは刊本に従った。

- XXVI 両写本では *asr* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Abiyām* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXVII 両写本では *Asbā* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Asā* と直されている。ここでは刊本に従った (これ以降も同様)。
- XXVIII 両写本では *al-dhanb* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *al-riyab* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XXIX 両写本では *fi* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *min* と直されている。ここでは両写本に従った。
- XXX マンチェスター写本では *sinīn* となっているが (M: 13b)、ケンブリッジ写本では *sana* となっており (C: 18a)、刊本では後者に従い *sana* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- XXXI 両写本では *Yahūshāfat* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Yahūshāfat* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXII 刊本の底本とされたケンブリッジ写本では *sana* の語はなく (C: 18a)、これが刊本では補われている。当該箇所はマンチェスター写本には、*sana* とあり (M: 13b)、校訂者の推測が正しかったことが確認された。
- XXXIII マンチェスター写本では *Būrām* と (M: 13b)、ケンブリッジ写本では *Bawārim* となっているが (C: 18a)、刊本では *Yūrām* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXIV 両写本では *Yahū* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Yahū* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXV 両写本では *Imrān* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Umri* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXVI マンチェスター写本では *Atlāyā* と (M: 13b)、ケンブリッジ写本では *Atlāyā* となっているが (C: 18a)、刊本では *Atlāyā* と直されている。ここでは刊本に従った (これ以降も同様)。
- XXXVII マンチェスター写本では *Yūshā* と (M: 13b)、ケンブリッジ写本では *Yūshā* となっているが (C: 18a)、刊本では *Yūshā* と直されている。ここでは刊本に従った (これ以降も同様)。
- XXXVIII 両写本では *Yūsha* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Yūshib* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XXXIX 両写本では *aybat-hu* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *amm-hu* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XL ケンブリッジ写本では *Alilāyā* と前出の際とは異なる綴りになっている (C: 18a)。
- XLI 両写本では *Yūyada* となっているが (M: 13b; C: 18a)、刊本では *Yūyada* と直されている。ここでは刊本に従った (これ以降も同様)。
- XLII マンチェスター写本では *intahabat* となっているが (M: 14a)、ケンブリッジ写本では *intahaba* となっており (C: 18a)、刊本では後者に従い *intahaba* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- XLIII マンチェスター写本では *abraša* となっているが (M: 14a)、ケンブリッジ写本では *bariṣa* となっており (C: 18b)、刊本では後者に従い *bariṣa* と翻刻されている。ここでは刊本に従った。
- XLIV 両写本では *Yūtām* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *Yūtām* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XLV 両写本では *sitt 'ashar* となっているが、(M: 14a; C: 18b)、刊本では *sitt 'ashra* と直されている。ここで刊本に従った。
- XLVI 両写本では *al-madīna* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *madīna* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XLVII 両写本では *Sīstīya* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *Sabastīya* と直されている。ここでは刊本に従った。
- XLVIII 刊本では、この後に、両写本にはない「彼らが彼らの宗教に入信すると *fa-lammā dakhālū fī dīnⁱ-him*」という語句が補われている。ここでは両写本に従った。
- XLIX 両写本では *ammā* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *illā* と直されている。ここでは刊本に従った。
- L 両写本では *alā* の語はないが (M: 14a; C: 18b)、刊本では補われている。ここでは両写本に従って『律法』を目的語として読んだ。
- LI 両写本では *wa* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *fa* と直されている。ここでは両写本に従った。
- LII 両写本では *illā 'inda filasṭīn* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *illā bi-jund filasṭīn* と直されている。ここでは刊本に従った。

- LIII 両写本では「300キントールの金 *thalāthmi'a qintār dhahab^{am}*」となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では、「300キントールの銀と30キントールの金 *thalāthmi'a qintār fiḍḍa wa thalāthīna qintār dhahab*」と『旧約聖書』の記述に従って直されている。しかし、ヤアクービーが依拠した情報源にこの形の記述があったと確定することは難しいため、ここでは両写本に従った。
- LIV 両写本では *burūj* となっているが (M: 14a; C: 18b)、刊本では *darajāt* と直されている。ここでは両写本に従った。英訳でも *burūj* で読むべきとされ詳しく説明されている (E: 326, n. 275)。
- LV 両写本では *Tūqīm* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *Yūyaqīm* と直されている。ここでは、*Yūqīm* と読んだ。
- LVI 両写本では *Fir'awn al-a'raj wa-malaka-hā* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *Fir'awn al-a'raj malik-hā* と直されている。ここでは両写本に従った。
- LVII 両写本では *يهونصم* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *Yahūyāqīm* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LVIII ケンブリッジ写本では *Banū* が *بنا* となっている (C: 19a)。
- LIX 両写本では *lam tazal* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *lam yazal* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LX 両写本では *wa-lammā* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *fa-lammā* と直されている。ここでは両写本に従った。
- LXI 両写本では *Sulaynān* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *Saltā'il* と前出の綴りとは違う形で直されている。ここでは刊本に従った。
- LXII ケンブリッジ写本では *sitta* となっており (C: 19a)、刊本ではこれに従い *sitta* と翻刻されているが、この単語はマンチェスター写本にはない (M: 14b)。ここでは刊本に従った。
- LXIII 両写本では *طوا* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *khalawna* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXIV 両写本では *sab'a* となっているが (M: 14b; C: 19a)、刊本では *tis'a* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXV マンチェスター写本では *حفظم* と (M: 14b)、ケンブリッジ写本では *حيفم* となっているが (C: 19a)、刊本では *Akhīqām* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXVI マンチェスター写本では *al-yawm* となっているが (M: 14b)、ケンブリッジ写本ではこの単語が脱落しており (C: 19a)、刊本では後者に従いこの単語は脱落している。ここではマンチェスター写本に従った。
- LXVII 両写本では *انم* となっているが (M: 14b; C: 19b)、刊本では *an ya'mura* と直されている。ここでは刊本に従った。
- LXVIII 両写本では *sunna* となっているが (M: 15a; C: 19b)、刊本では *sunan* と直されている。ここでは両写本に従った。